

近藤 光 男 訳注

『国朝漢学師承記』

書香馥郁たる中国学の百科全書

鶴 成 久 章

はじめに

『日本中国学会五十年史』（日本中国学会 一九九八）に、藤田祐賢氏の「追憶拾遺」という文章があり、その中で、日本中国学会第一回大会の思い出を語ったくだりに次のような一節がある。

……発表者の名前や発表内容は、これまたおおかた忘れてしまいました。ただ一人、京都大学所属だった近藤光男氏が「漢学師承記」の資料について発表された内容は非常に充実していたと記憶しています。当時の近藤氏は、その発表内容もさることながら、いかにも若々しい研究者ぶりで、濃い茶色の背広をきちんと

着こんだ颯爽たる姿は、今でも眼底に焼きついています。同氏が強調した「述べて作らず」のことばもまじめな発表者の態度にまことにびつたりで印象的でした（168頁）。

大会の開催は昭和二十四年であるから、近藤氏が江藩の『国朝漢学師承記』について研究発表を行ってから既に半世紀以上が過ぎてゐる。しかも、氏がこの書物の研究に着手したのは、時あたかも学徒動員前夜の頃であつたという。

そして、ついに昨年、すなわち平成十三年七月、近藤光男訳注『国朝漢学師承記』が明治書院から上梓された。上、中、下の全三冊、凡そ千五百頁に垂んとする大著である。

「旧稿」は早期に成り、その後は気づくことのあるごとに補訂するだけで筐底に在つたのを、出版の目処が立つてから全面的に書き改めたと言う（下巻「あとがき」472頁）ことだが、以下に紹介するように、この大作には「旧稿」作成時以来一貫する、氏の学問方法ないし精神が縦横に示されており、近藤中国学の集大成とよぶに相応しい内容となつてゐる。

近藤氏は、『清朝考証学の研究』（研文出版 一九八七）や『清詩選』（集英社 一九六七）をはじめ、『戴震集』（朝日新聞社 一九七二）、「四庫全書総目提要 唐詩集の研究」

（研文出版 一九八四）その他清朝の学術に関する該博かつ精緻な研究を多数発表しており、清朝の学問に精通した類い希な碩学として知られる。①ただ、改めて言うまでもなく、氏は決して今日狭義でいうところの清朝考証学研究的の専門家ではない。

そもそも、江藩の手になる該書は、清朝の学術史の表層を知るのみでは精確な読解すらおぼつかない。ましてや、全巻の訳注となると、清朝の碩儒並の学力が要求される。清儒の学的態度を深く体得した上で、先秦から清朝に至る中国の学術を、經学文学、文字音韻学、史学について博く理解し、さらに天文曆算、楽律、古代科学技術史、地理、政治、経済にまで及ぶ広汎な学問分野にわたる学識がなければ、『国朝漢学師承記』全書の訳注は到底不可能であったと思う。近藤氏であればこそ実現できた偉業である。

構成

江藩の原書の構成は、基本的には時間軸に沿いつつ、学者の出身地域や師承・交友関係を考慮しつつ編まれている。まず、巻一は閻若璩や胡渭といった清初の学者の記を取り上げ、巻二から清朝中葉の学者の記に入る。巻二から巻三

記に終わる。巻四は江藩の師である王昶、朱筠らの記を中心とする。巻五は江永に始まり、金榜そして戴震といった皖派の学者の記を収める。続く巻六は盧文弨、紀昀ら、戴震が京師で学縁を持った人々の記を中心とし、孔広森の記を最後に置く。すなわち、巻五の戴震の記と密接に関わり、それを補完する役割をも果たす。巻七は揚州の学者で江藩の友人といつてよい人たちの記が集められている。そして、やや意外ながら、巻八に至って黄宗羲、顧炎武といった明の遺老の記がやつと出てくる。その事情については、「自跋」（下巻227〜236頁）で語られるが、この両名を巻末に置き、閻若璩を巻首に置くあたりに、江藩の学問観が濃厚にうかがえる。

いわゆる「戴段二王」の学のうち「段二王」の学については、『師承記』の執筆が彼らの学問を総括するにはやや早いという事情から、戴震の記の末尾で簡略に触れられるのみである。もともと、近藤版『国朝漢学師承記』（※以下、「本書」というのはこれを指す）では、段玉裁については『説文』学を中心にその学説が諸処に紹介されており、また後述のように、王念孫についてもその学問の一斑が解説されている。

次にここで本書の構成を概観しておく。上巻にはまず、

『国朝漢學師承記』広州原刊本の「封面」並びに「阮元序」の冒頭の書影が掲げられ、続いて上巻の「目次」「凡例」がくる。この「凡例」は中巻、下巻にもそのまま冠せられているが、この「凡例」からして、本書の全体像を垣間見るのに十分な内容となっている。「凡例」のあとには「解説」があり、続いて本篇に入って「阮元序」、原本の「目録」、そして巻一の「自序」から巻三の錢大昕の記までを収める。中巻は、巻四の王昶の記に始まり、巻六の孔広森の記まで。下巻は、巻七の陳厚耀の記から巻八の「自跋」までを収めたあと、『国朝経師経義目録』、『汪喜孫跋』が続く。さらに、付録として近藤氏の手になる極めて詳細な「国朝漢學師承記年表」「索引」と「挿図一覧」があり、最後に「あとがき」である。

テキスト

本書の特色の一つとして、嘉慶二十三年（一八一八）広州原刊本の全貌が余すところなく示されている点がまず挙げられる。氏がこの原刊本を手に入れてから、「その後、今日に至るまで六〇年、どこにもこの本を見かけない。」（下巻「あとがき」467頁）と言うように、この広州原刊本は今や極めて貴重なテキストである。ちなみに、三聯書店の「中

国近代學術名著」に入れられた『漢學師承記（外二種）』（一九九八）の「導言」には、

『漢學師承記』及附『経師経義目録』、和『宋學淵源記』、原刊本均未見。今見最早刊本、是清道光九年（一八二九）江順銘重修の『節甫老人雜著』本、此叢書在清光緒十二年經江巨渠補刊、改名『江氏叢書』。但二書通行的均是清咸豐四年（一八五四）『粵雅堂叢書』二編本。……這次校勘、江藩二種、均取『粵雅堂叢書』本為底本、參考『江氏叢書』本、周予同選注本、……

と言う。また、これより先に中華書局より出版された『国朝漢學師承記 附国朝経師経義目録 国朝宋學淵源記』（一九八三）の「点校後記」には、

這次整理、……以光緒九年山西書局本為底本、除標点分段外、還校以嘉慶二十三年阮元刻本、咸豐四年粵雅堂叢書本、光緒十二年江氏叢書本、光緒二十二年宝慶勸學書社本。……

とあるが、原刊本を見ていれば正せそうな誤刻がほとんどそのままであったりするところをみる限り、「嘉慶二十三年阮元刻本」を以て校勘したというのは俄には信じがたい。中国における広州原刊本の存佚については詳らかでないが、『中国古籍善本書目 史部上』（上海古籍出版社 一九九三）

「伝記類一」には、「国朝漢字師承記八卷経師経義目錄一卷
清江藩撰 清嘉慶二十五年藝古堂刻本 清王振声批校並
跋」を載せるのみである。

ところで、これはとくに原刊本を底本にしているという理由からではないが、現在通行する『師承記』の排印本の句読について、本書では少なからずその誤りを正している（例えば、上巻308頁・316頁の注29、下巻229頁・233頁の注10）。また、原文の文字を掲げるに際しては、篆文の書体に至るまで原刊本の実態を忠実に保持しており、擡頭のある箇所も一字空けにして示すなど周到な配慮がほどこされている。こういった点からしても、本書は今後『師承記』研究の定本となるに相違ない。

資料（集句の法）

次に指摘したいのは、江藩が『師承記』の著述にあたって用いた「集句の法」の実態とその意義が、本書において鮮やかに解き明かされている点についてである。本書中、各記の後に付せられる（□□□□の記の資料）において氏は、江藩が材料とした素材、さらには、その素材が作られたときに使われた素材にまで考証の手を伸ばし、「集句の法」に基づくこの書の内面的な構造と江藩の著述意図を細部にわ

たって分析している。

この「集句の法」については、本書上巻の「解説」（「甘泉江藩纂」の「纂」について）並びに「清朝漢学のかたち」「漢字師承記」の文章（「清朝考証学の研究」所収）に詳しいが、敢えて贅言すれば、「述而不作」の精神に基づき、自ら文章を作るのではなく、その人物について書かれた行状・墓誌銘・墓表・伝などの切り接ぎによって記を作り上げる編纂の方法である。なお、江藩はこうした編纂の方法について自ら述べてはおらず、この事実は、氏が『師承記』の構造を詳細に検討し分析した結果、知り得たものにほかならない。江藩が利用した碑誌伝状の撰者は江藩の師友の十数家に及び、中でも錢大昕の文章を最も重んじたこと、また、桐城の古文家の書いた文章は意識的に避けられていること等が実証されている。その他、巻四の朱筠の記に載せる「説文解字叙」が、実は王念孫の代作であることを明らかにして、加えて高郵王氏の学の一斑を語るあたりなどは何とも痛快である。

氏はかつて、「集句の法」には、選択した素材の性質とその配列のしかた、素材の取り扱い方そのものによって独自の主張が秘められると指摘している（「清朝漢学のかたち」14～15頁）。そして、その「独自の主張」とは、氏によれば

歴史に託した文学的な主張のことであるという。氏は歴史の記述が同時に文学の営みであるという認識に立ち（『漢学師承記』の文章「36頁」）、『師承記』を取り扱うに際して、経学史の問題としてのほかに、文学の問題としての解釈を与えるべきことを主張する（同32頁）。かくて「集句の法」にこめられた江藩の濃密な文学意識と熱烈な表現意欲を読み解いた上で、氏の文学者としての慧眼は、『師承記』における文体の問題にまで及ぶ。氏はかねてより、江藩の文章観が、典故を多用した、言ってみれば「集句の法」に接点を持つような駢散文を重視するものであり、巻六の孔広森の記に「戴氏遺書序」の全文を収めると、巻七の汪中の記に「自序」一篇を引くところに、江藩の「微言大義」が見て取れる点を指摘している（同50頁）。本書でも、孔広森の記、汪中の記において、「注」でその駢散文の構造を努めて示そうとしているが、このような『師承記』の文体に対するきめ細かな考察は、本書を読む際に見逃してはならないと思う。

注釈

さらに、本書の最大の特徴として取り上げたいのは、本書が最も多くの頁数をついやす「注」である。なお、その

注釈の意図について、近藤氏は自らこう言っている。

本書において私は注に決して無駄を書かぬように心掛けたつもりである。……私が考える無駄とは、その注について読者が考えてくだされば分かることまで、つい言及しかねないことである。それを慎むかわりに、考えていただくための資料はおちどなく集めておくことに努めなければならぬ。また典拠は訓詁に至るまで努めて細かく示しておく必要がある。……実はもしも注だけ、あるいは注から、読んでいただいても面白いように、注からその本文がすぐ検索できるように工夫している。（下巻「あとがき」43頁）

また、氏は「注」の方法ないし態度として、清朝の学者におけるそれを宗とし実践したものである（同43頁）とも言う。その方法ないし態度とは、注釈者の恣意をもって料つた作者の意を記すなどして、それを読者におしつけるような行為を極度に忌む（『清朝考証学の研究』「詩注の難きこと」126頁）、すなわち、注釈者として、「師心自用」を厳しく戒めるというものである。もともと、こういった態度・精神に徹しつつも、その「義取謹嚴」という注釈の姿勢を通じて、あたかも江藩その人が「集句の法」に拠りつつ極めて雄弁に語ろうとしたのと同質の、熱烈な学問的主張を

氏が行っていることは疑いない。注釈という中国古典学研究の枢要な方法に対する自らの理念、すなわち注釈たるものはかくあるべしという信念が、本書には主張のかたちをとらない主張として表現されている。

ところで、本書は無論、近藤氏個人の仕事であるが、「注」の各所において氏は師友の「学恩」「学縁」への言及を惜しまない。たとえそれが半世紀以上前のものであろうと、また、氏の学問からすれば、やがては自ら解決し得たであろう問題についてであれ、いちいち記す。ここに、氏の学に淵源が有ることを知るのは勿論だが、またそこには氏の誠実な学問態度と謙虚な学問人生が映し出されていることにも留意したい。

本書の「注」には、氏自身が撮影し、引伸した〔下巻〕「あとがき」(仍頁)善本・稀覯本の貴重な写真が多数収められている。言うまでもなく、これは氏が精査した万巻の書のほんのごく一部であり、氏がこの大作の上梓に至るまでに読んだ書物の数は膨大なものであったはずである。拙評の表題にいう「書香馥郁たる」とは、直接にはこの美しい装訂の本書そのものに対する形容であるが、加えて、それは本書の背後でゆたかに薫^{かほ}る万巻の書の香りのことでもある。

翻訳文

本書の特色を数え上げればきりがなが、最後に一点、特にふれておきたいと思うのは、翻訳文である。本書には、翻訳文として、「訓読文」と「現代日本語訳」とが用いられている。ただ、意外というか、いやむしろ近藤氏の学問の淵源を尋ねれば当然というべきか、当初氏の「師承記」の翻訳文には「現代日本語訳」しかなかったという。つまり、本書の日本語訳は訓読を通じて作成されたものではなく、元来中国語の原文から直接に翻訳されたものである。翻訳について、氏は「旧稿」作成の頃、「中国古典の翻訳」という文章で、

結局、訳文は翻訳者の文章なのであり、またそうでなくては生きてこない。従っていわば翻訳の技術としては原文のひとくぎりについてまずその意味をしつかりとつかんでしまう、そしてそれを完全な国語の表現によつて発表する、という段階がくりかえされてゆくのが望ましく、またそのようにして始めて理想の翻訳ができ上ると考えられる。(『言語生活』26号・26頁 一九五三)

と主張しているが、本書の「現代日本語訳」はその実践と

して、ひたすら「作者の意を知る」ことに尽くした上で、曖昧な翻訳を避けるべく、思い切つて原文を捨て去るほどの気持ちで、努めて自らの文章で述べることが行われたと思われる。

また、注意すべきは、作者の心を知った上での正確な翻訳であることに加え、

およそ『国朝漢学師承記』は全巻が佳い文章で書かれていればこそ多くの読者を獲得したのであり、これによつて漢学と駢文の世界に人を誘い入れて魅了するものであつたにちがいない。(上巻「解説」43頁)

と主張するほどに、『師承記』の文章の美しさを知り抜いた氏が、自らの翻訳に課したに相違ないのは、この美しい文章を、やはり自らの美しい日本語によつて翻訳することであつたはずである。そうであるが故、本書の典雅な「現代日本語訳」は、それだけを読み物として通読するのにも十分に耐えうるものになつてゐるのだと思う。

さて、このような「現代日本語訳」に加えて、「旧稿」にはなかつた(下巻「あとがき」472頁)という「訓読文」が付せられている。この「訓読文」は翻訳の構造的理解を助ける、つまり氏が原文をどう読んだかを示す役割を果たすものである。また、「訓読文」には努めて助字の存在が示さ

れており、個々の助字を氏がどう訓んだかも明らかにされている。

つまり、本書の「翻訳」は、原文の直説と訓読、両者の長所と限界とを十分にわきまえた上で、その最も効果的な融合を図ることによつて、最善の「翻訳」に到達しようとしたものであり、近藤氏の「読書の学」を遺憾なく発揮する場となつてゐる。

おわりに

本書上巻の「解説」において、氏はこう宣言する。

周氏の選注が出てよりここに六十年、いまこの書物の全貌を隈なく示すに足る注を完成し了えた。かくて本書を読んでいただけるならば、経学の研究について必須の基礎知識が整ふこととなつたはずである。またこれは漢学とか宋学とかの枠を超え、さらには清朝考证学といった限界をも捨象して、およそ中国古典を精読しようとする人々にとつて、この書を必須の手びき書たらしめ得たことでもあると信ずる。(はじめに「4頁」)

この言葉に些かの誇張もないことは、本書を手にとつて見れば納得がいく。本書は教養に満ちてゐる。そもそも、

装訂の色からして意味がある（上巻「解説」22頁、下巻「あとがき」474頁）のには一驚する。また、『師承記』の本文から少々離れて適当な頁をめくってみても、楊雄についての説（上巻253頁・恵士奇の注35、下巻「あとがき」474頁）や、清朝の学者が「絶学」という語を使用する際のニュアンス（中巻483頁・孔広森の注168、下巻81頁・汪中の注61）、『四庫全書』纂修の当初の意図（中巻131頁・朱筠の注153）など、興味深い話柄は尽きるところを知らない。『學術節記』の如き「注」が本書を埋めつくす。豊富な図表も有り難い。そして、その一方で氏が本書において「未詳」の文字を忌避しないことも目を引く。「無徵不信」「蓋闕如」という姿勢に徹し、わからないことは後学の者へ課題として託す、このような態度そのものがまた重要な教えであると思う。

拙評の表題にいう「中国学の百科全書」とは、本書が単に『師承記』の訳注たるを超えて、幅広く中国学の知識・学問方法を教えてくれるという側面を含意したつもりである。

江藩の『国朝漢学師承記』がひとたび世に出ると、ベストセラーとして広く読書人に受け入れられ、その上、長い年月にわたって刊刻を重ねたといわれる。かつて『国朝漢学師承記』という書物自体が何度か版を変えつつ読み継が

れたように、この近藤版『国朝漢学師承記』も中国古典学を学ぶ者の恰好の手引きとして、広く読者を獲得し、また永く版を重ねるに違いないであろう。

明治書院、二〇〇二年七月刊、

「上」本文四八九頁、「中」本文四九〇頁、
「下」本文四七六頁、八万四千元

注

（1）近藤氏の主要な業績については、「近藤光男教授略年譜」『お茶の水女子大学中国文学会報』第六号 一九八七を参照されたい。

（2）近藤氏世代の学者を語るとき、忘れてはならない問題があると思うが、紙数の都合でいまここでは触れられないのを遺憾に思う。このことに関しては、本書下巻の「あとがき」、また氏が先に発表した『学恩五十年』（岩波書店『宮崎市定全集』第四巻・月報21 一九九三）、そして『戦国策 中』（集英社 一九七七）の「まえがき」を見られたい。